

らべたる心なり、扱魚をなといふ事、京のことばに鮓魚といふ、魚屋を魚屋といふ、酒の菜をさかなどいふは、魚にはかぎらぬ事なるべし、菜いろ／＼取ませて煮たるを、むかしは合菜といひしとなん、清少納言枕草紙に、たくみの物くふこそいとあやしけれ。○中あわせを皆くひつればと云々、今はかゝる古語も絶たり。

〔倭訓栞前編十〕さかな 看をよめり下酒の物をいふ、酒魚の義なるべし、魚鳥に看といひ、菜蔬に
蘵といふ、山肴野蘵などいへり、廣韻には凡非穀而食者曰看或作餚、通作穀、と見えたれば、字義は
必しも海味に限らざる也、禁中の式に三ツ看すはりてといふ事見えたり、さかなをはさむを、唐
山にて過菜といふ、魚舟に到て魚を買ひ者、もしさかなといへば、拒んで與へず、看は些少のものな
れば向來を祝すといへり。

〔古事記傳十四〕魚を那と云は、饌に用る時の名なり。○中さて菜も本は同言にて、魚にまれ、菜にま
れ飯に副て食物を凡て那と云なり。菜と魚とを別の言の如く思ふは、文字になづめる後のくせ
如く、古那と云名は、魚にも菜にもわたり、今世にも菜の字音にて佐伊と云ときは、魚にもわたり
たれり、又看の那も魚菜にわたり、万葉十一四十二丁に朝魚夕菜、これ朝も夕も那は一なるに、魚と
菜と字を替て書るは魚菜に涉る名なるが故なり、さて其那の中に、菜よりも魚をば殊に賞て美
き物とする故に、稱て真那とは云り、故麻那は魚に限りて、菜にわたらぬ名なり、今世に麻
那箸、麻那板など云も、魚を料理る具に限れる名なり。

〔大上薦御名之事〕女房ことば

一さかな こんとも 御さかなとも 一うほ 御まな

〔江家次第一正月〕供御藥

次入御銚子餘分、次移入御酒盞餘分、給之於後取人、又入大土器

或此間給看於後取多給大根、元日人多精

進之故歟、或給串刺、

〔天文日記〕天文五年正月十三日、從興正寺、佳例之飯之如形、祝儀點心候、添看其後鴈之肴、鯉熊引也